

各 関 係 機 関 団 体 の 長 員 } 殿
各 病 害 虫 防 除 員

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病害虫防除所)

令和4年度病害虫発生予報第7号(10月)について

このことについて、病害虫発生予報第7号を発表したので送付します。

予報第7号

10月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	10月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
大豆	吸実性カメムシ類	やや多	多	並
かんきつ	ミカンハダニ	やや多	やや多	やや多
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ	やや少 やや少	やや少 並	並 少
果樹共通	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ)	多 ³⁾	— ³⁾	多 ³⁾
冬春ナス	ミナミキイロアザミウマ	少	やや少	やや多
冬春イチゴ	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類	並 並 やや少	並 並 やや少	少 並 少
野菜共通	ハスモンヨトウ オオタバコガ コナジラミ類	やや少 やや多 やや少 ⁴⁾	やや少 やや多 並 ⁴⁾	やや少 やや多 並

注1) 予報の発生量は平年(福岡県の過去10年間)及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。
それぞれの条件は、少発生(-)、やや少発生(-~±)、並発生(±)、やや多発生(±~+)、多発生(+)として示し、+-を総合的に判断して発生量を予想しています。

注3) 果樹共通・果樹カメムシ類の発生量は年次間変動が大きいため、前年比としています。

注4) 野菜共通・コナジラミ類は、2018年から調査を実施しているため、平年は過去4年間としています。

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。
発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス
URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①



最新の病害虫発生状況

○Twitter (ツイッター) で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。
Twitterの本アカウント(福岡県農作物病害虫情報)へのアクセス
URL: https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード②



<予想される向こう1か月の天候(令和4年10月1日~10月30日)>

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。気圧の谷や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

九州北部地方	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低20 並30 高50% 高い見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み

(福岡管区気象台 令和4年9月29日発表1か月予報より抜粋)

【普通作物：大豆】

1 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

(2) 予報の根拠

ア ミナミアオカメムシの県下5カ所の予察灯における5月1半月~9月5半月の誘殺虫数は平年より多かった(+).

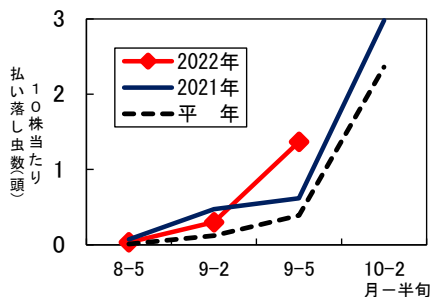
1,286頭(平年282.9頭、前年172頭)

イ 9月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+).

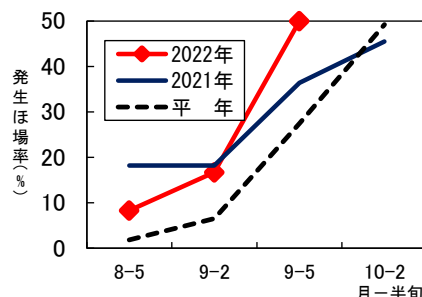
・ ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシ

10株当たり払い落とし虫数1.4頭(平年0.4頭、前年0.6頭)

発生ほ場率50.0%(平年27.4%、前年36.4%)



ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシ発生密度の推移



ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシ発生ほ場率の推移

・ イチモンジカメムシ

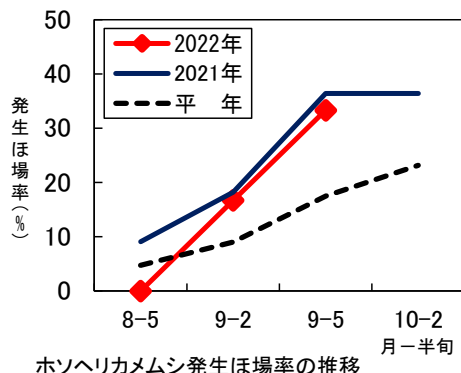
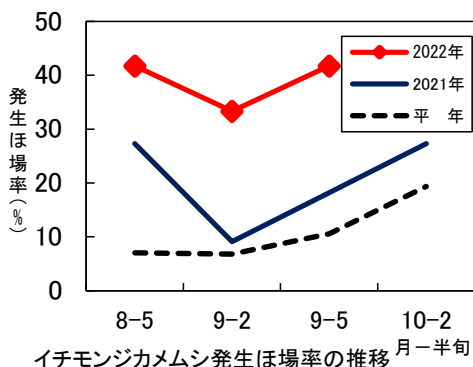
10株当たり払い落とし虫数0.4頭(平年0.1頭、前年0.2頭)

発生ほ場率41.7%(平年10.6%、前年18.2%)

・ ホソヘリカメムシ

10株当たり払い落とし虫数0.4頭(平年0.1頭、前年0.3頭)

発生ほ場率 33.3% (平年 17.5%、前年 36.4%)



ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上の注意

- ア 吸実性カメムシ類による子実被害は収穫期まで続く。また、ほ場での発生量のばらつきが大きいので、必ずほ場での発生状況の把握に努め、発生が多い場合は追加防除を行う。
- イ 薬剤散布を行う場合には、薬剤が着莢部によくかかるよう丁寧に散布する。
- ウ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。
- エ 例年9月下旬~10月上旬にかけてミナミアオカメムシの発生量が急増するので、発生状況には十分注意する。
- オ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 9の内容を確認の上、農薬の使用基準(使用時期、使用回数等)を遵守し、周辺ほ場への飛散防止対策を講ずる(以下の病害虫についても同じ)。

【果樹：かんきつ】

1 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。

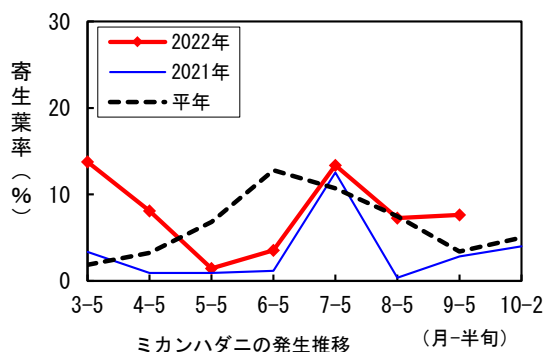
寄生葉率 7.6% (平年 3.4%、前年 2.8%)

発生ほ場率 45.5% (平年 35.1%、前年 36.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 果実に寄生が認められる場合は、薬剤防除を実施する。薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-~±)。

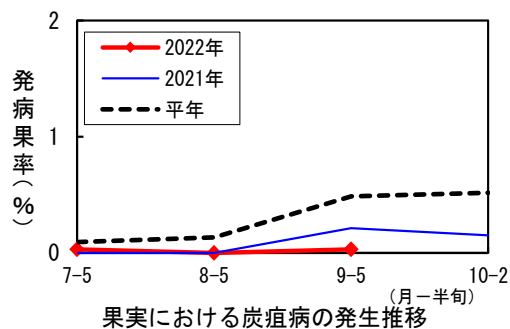
発病果率 0.03% (平年 0.5%、前年 0.2%)

発生ほ場率 9.1% (平年 30.9%、前年 27.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。



イ 降雨が続いた場合や、前年発生が多かった園では、薬剤防除を徹底する。

2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 9月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。

寄生果率 5.7%（平年 12.6%、前年 16.5%）

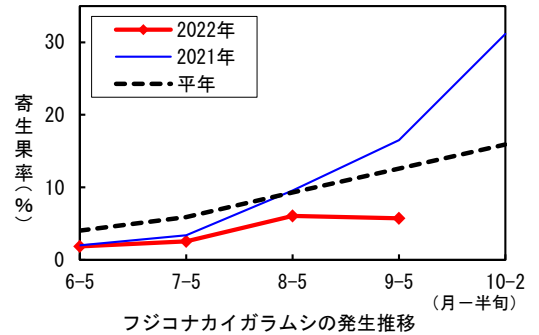
発生ほ場率 81.8%（平年 86.5%、前年 90.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹カメムシ類の防除等で、カイガラムシ類の天敵に影響のある薬剤を使用する際は、フジコナカイガラムシに効果のある薬剤を選択する。

イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、混み合った枝を整理するとともに、散布むらがないよう十分量の薬液を丁寧に散布する。



【果樹共通：果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ）】

(1) 予報の内容

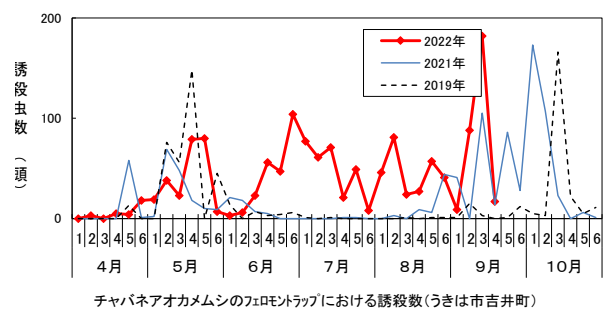
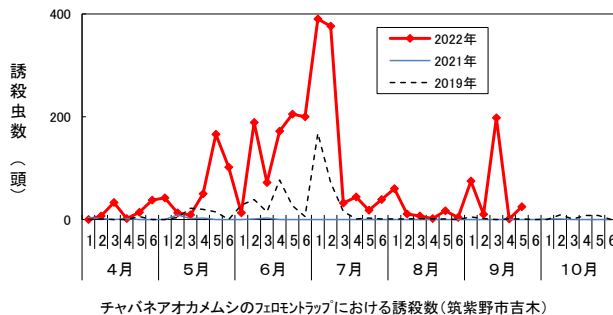
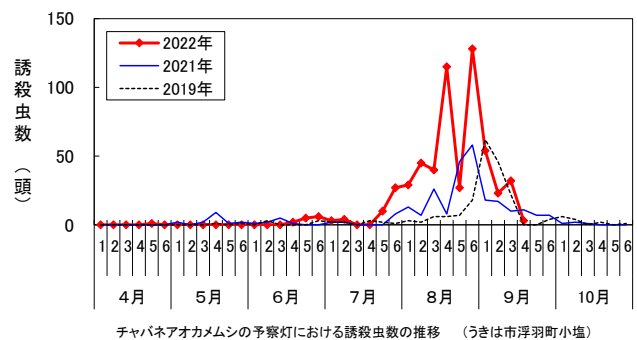
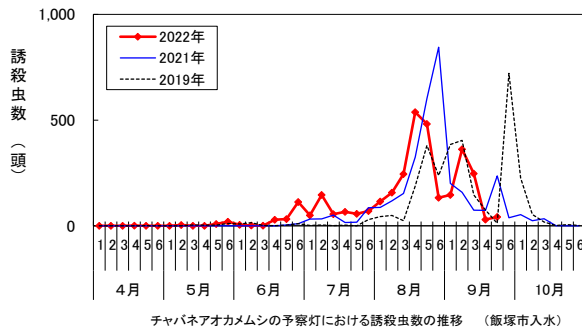
発生量：前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月4半月～9月4半月までの予察灯による誘殺成虫数は前年より多く（+）、越冬成虫量・ヒノキ球果着生量が同程度であった2019年よりやや多かった。フェロモントラップによる誘殺成虫数は前年・2019年より多かった（+）。

予察灯（6カ所）平均：838頭（前年494頭、2019年785頭）

フェロモントラップ（4カ所）平均：186頭（前年56頭、2019年12頭）



イ 9月2半月におけるヒノキ球果ビーティングによる果樹カメムシ類の捕獲成幼虫数は、前年並（±）で2019年よりやや多く、成虫比率は前年、2019年より高かった。

平均捕獲成幼虫数：7.7頭（前年 8.9頭、2019年 5.6頭）
 成虫比率：85.9%（前年 64.5%、2019年 44.9%）

ウ 9月2半旬のヒノキ球果の1球果当たりの口針鞘数（12地点）は前年・2019年より多く、ヒノキからの離脱の目安である25本/球果を超えた地点もある（+）。

口針鞘数：18.3本（前年 10.9本、2019年 7.9本）

エ 9月5半旬調査の結果、カキでの被害果率は前年よりやや多く（±～+）、越冬成虫量・ヒノキ球果着生量が同程度であった2019年より多かった。

カキ(9月5半旬) 被害果率 2.0%（前年 1.2%、2019年 0.1%）
 発生ほ場率 81.8%（前年 54.5%、2019年 36.4%）

オ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 誘殺状況及び成虫比率・口針鞘数から、地域によっては果樹園への飛来が始まっていると考えられる。

イ 果樹園への飛来時期は地域差が大きく、同一園内でも被害の発生は偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

ウ 広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。

エ 降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。

オ カイガラムシ類などの天敵に影響のある薬剤を使用する際は、該当する害虫にも効果のある薬剤を選択する。

カ 今後の発生状況等については、病害虫防除所ホームページを参照する。

<<http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html>>

【野菜：冬春ナス】

1 ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

寄生葉率 0.4%（平年 6.0%、前年 0.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

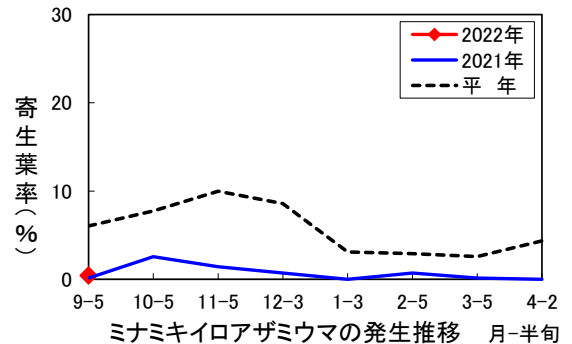
イ 防虫ネットを展張し、定期的な薬剤散布を実施する。

ウ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

エ 薬剤感受性が低下しているため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

オ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。
 <県ホームページ掲載の「令和4年度版病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「冬春ナスのIPMマニュアル」参照>

https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/642621_61350544_misc.pdf



【野菜：冬春イチゴ】

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

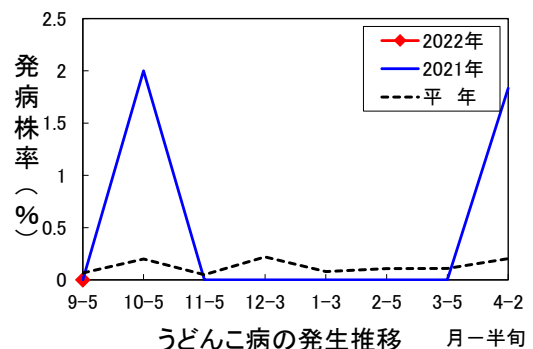
発生量：平年並、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0%（平年 0.1%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 不要な下葉は早めに除去する。防除は下葉かき後に行うと効果的で、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。
- イ ビニル被覆後は発生が多くなるため、被覆までに重点的に防除を行う。薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

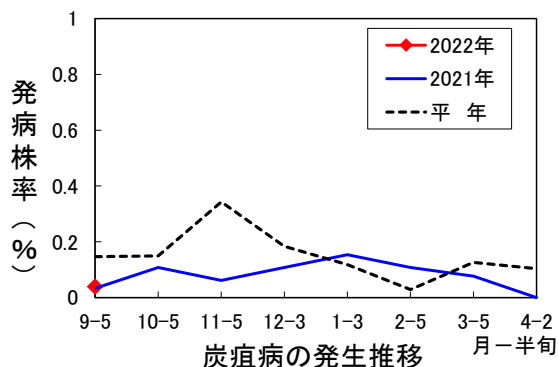
ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病株率 0.04% (平年 0.1%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病株は、残渣を残さずに周囲の土ごと掘り取り、速やかにほ場外に持ち出し処分する。
- イ 하우스内の排水を図り、多湿にならないようにする。



3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

(2) 予報の根拠

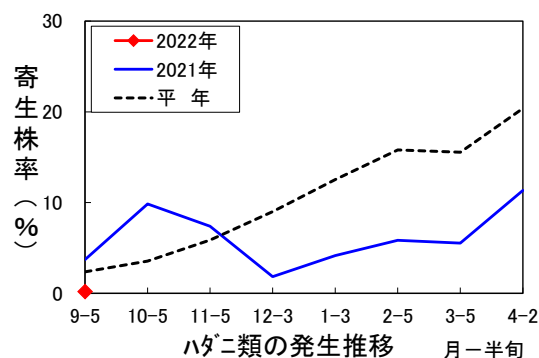
ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-~±)。

寄生株率 0.2% (平年 2.4%、前年 3.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ビニル被覆後は発生が多くなるため、被覆までに重点的に防除を行い、初期密度を低下させる。
- イ 薬剤感受性が低下しやすいので、気門封鎖剤も利用し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
また、ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性が乏しいため、葉裏に薬液が十分付着するように防除を行う。防除は摘葉後に行うと効果的である。
- ウ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。
<県ホームページ掲載の「令和4年度版病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「イチゴのIPMマニュアル」参照>
https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/642621_61350538_misc.pdf
- エ 親株用の苗や補植用の余り苗についても防除を怠らない。



【野菜共通】

1 ハスモンヨトウ

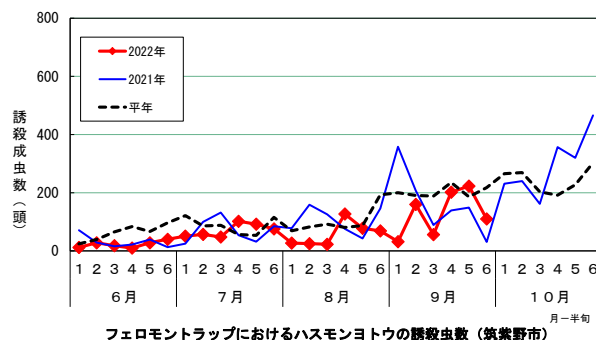
(1) 予報の内容

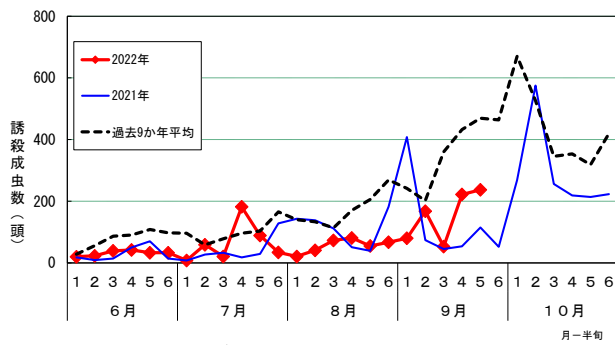
発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 9月のフェロモントラップにおける誘殺虫数は、平年よりやや少なく推移した(-~±)。

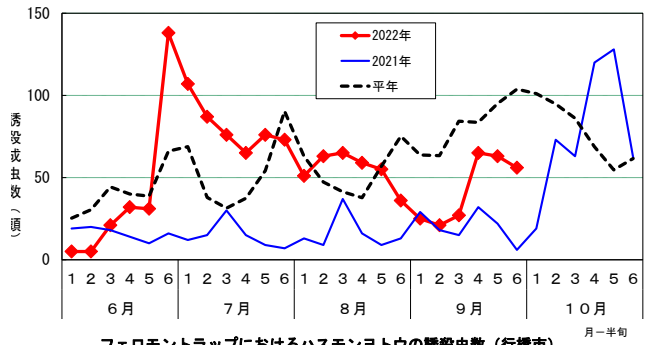
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。





フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺成虫数（筑後市）

※2021年よりトラップの場所は筑後市内で移動



フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺成虫数（行橋市）

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 地域によって発生量に差があるため、ほ場の発生状況に注意し、発生を確認したら直ちに防除を行う。
- イ 薬剤防除は若齢幼虫を対象に実施する。
- ウ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。（以下の害虫についても同様）<<http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html>>

2 オオタバコガ

(1) 予報の内容

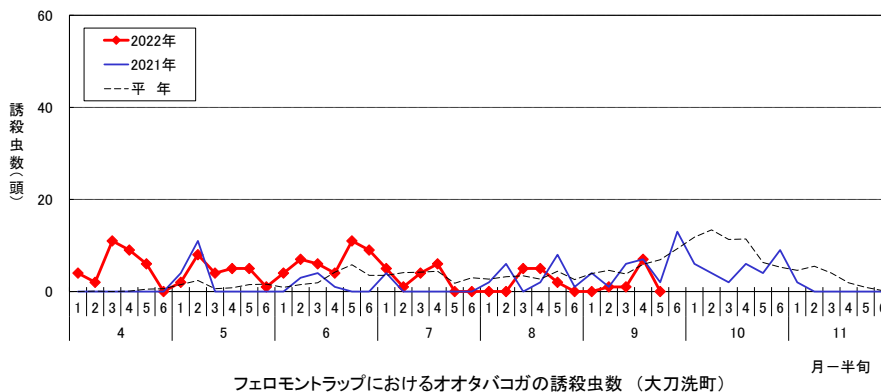
発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

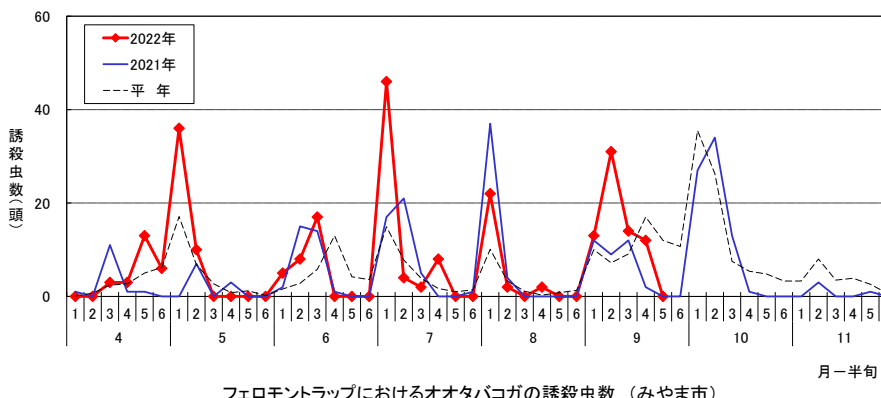
- ア 9月のフェロモントラップにおける誘殺虫数は平年よりやや多く推移した（±～+）。
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

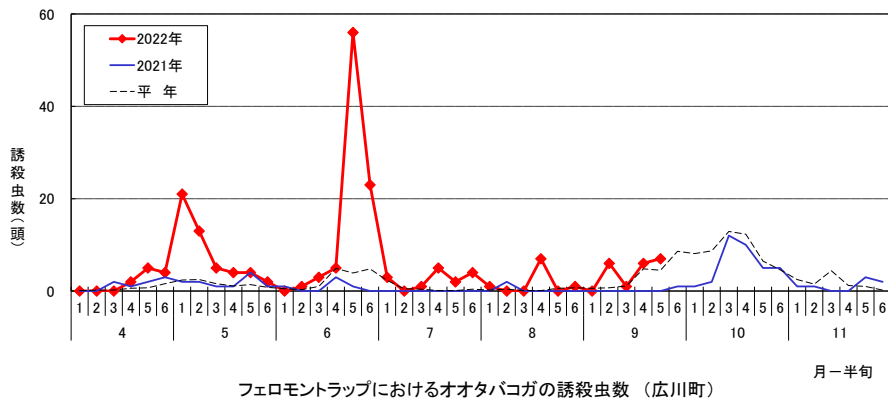
- ア 地域によって発生量に差があるため、ほ場の発生状況に注意し、発生を確認したら直ちに防除を行う。
- イ 薬剤防除は若齢幼虫を対象に実施する。



フェロモントラップにおけるオオタバコガの誘殺成虫数（大刀洗町）



フェロモントラップにおけるオオタバコガの誘殺成虫数（みやま市）



フェロモントラップにおけるオオタバコガの誘殺虫数（広川町）

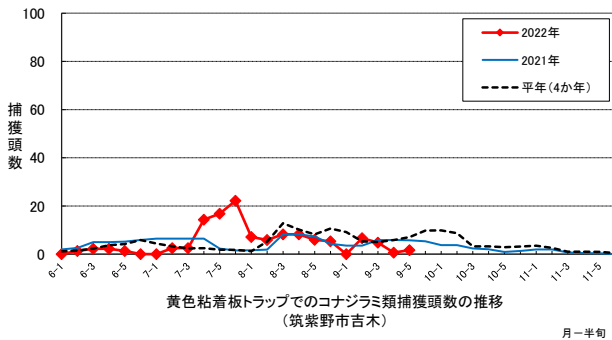
3 コナジラミ類

(1) 予報の内容

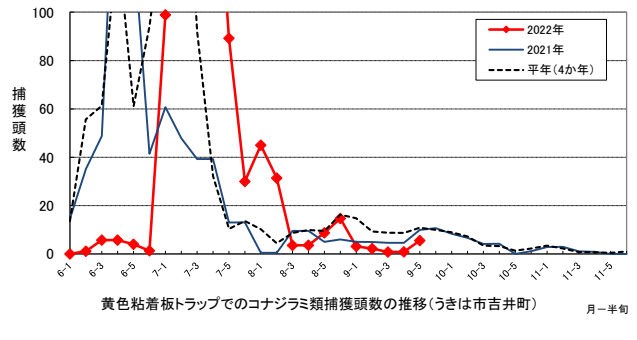
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 9月の粘着板トラップにおける捕獲虫数は平年よりやや少なく推移した（-〜±）。
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている（±）。



黄色粘着板トラップでのコナジラミ類捕獲頭数の推移（筑紫野市吉木）



黄色粘着板トラップでのコナジラミ類捕獲頭数の推移（うきは市吉井町）

※コナジラミのトラップ調査は2018年から実施しているため、過去4年の平均値を平年値としている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。
- イ 施設内側に黄色粘着シートを設置するなど発生状況を把握し、発生を確認したら、薬剤防除を行う。
- ウ ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。
- エ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壤にまく。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。